

Title	奈良時代における王権と寺院造営
Author(s)	奥村, 茂輝
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59372
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 大阪大学の博士論文について をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	奥村茂輝
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第25330号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	奈良時代における王権と寺院造営
論文審査委員	(主査) 准教授 高橋 照彦 (副査) 教授 福永 伸哉 教授 藤岡 穰

論文内容の要旨

本論文は、奈良時代における都城の寺院、とりわけ平城京遷都後に新たに創建された興福寺、法華寺、東大寺を主な検討対象として、出土瓦などの考古資料をもとに、それらの造営過程について解明したものである。そこでは、寺院や宮殿の瓦を生産・供給する窯跡、寺院とも関連が深い平城京内の離宮などとの比較も行い、奈良時代の寺院造営の歴史的特質ならびに王権とのかかわりを論じている。全体は8章からなる本論に序章を加えて構成されており、分量は400字詰原稿用紙に換算して660枚、図表は85点である。

序章では、寺院造営にかかわる学史を整理した上で、出土瓦の検討が重要であることを示し、第1章では、瓦のうちでも研究の主軸となる軒瓦に関して、年代の決定方法やその歴史資料としての特質をまとめ、あわせて用語の整理を行って、論文の導入としている。

第2章では、平城宮や京内の各寺院に瓦を供給した平城京北部の奈良山丘陵の瓦窯跡を網羅的に取り上げ、その生産技術の変遷や供給先との関係について検討を試みている。その結果、平城宮所用瓦と官寺所用瓦の生産地が截然と分かれている実態を確認した。そして、宮へ供給する瓦の生産地が造営省などの管理下にあることを指摘した上で、律令的な官司体制による厳格な生産の枠組みが瓦窯ごとの独自性の維持の要因であるとみなした。

その一方で、興福寺や法華寺・東大寺へ供給する瓦窯では工人の移動を含めた相互関係が認められ、その実態をより詳細に解明するために、次章以下の検討を進めた。

第3章では、興福寺の造営を組上に載せ、瓦の製作技法や形態の変化、瓦範の傷の進行度などを着眼点にして、堂舎の築造順序を復元し、「山階流記」などに伝承された各堂宇の建立時期を考古学的に実証した。さらに、興福寺の前身寺院であり、藤原氏の氏寺でもあった厩坂寺の所在地については長年の論争があるが、いくつかの考古学的検討をふまえ、奈良県柁原市の久米寺が最も妥当であるという結論も導いている。

第4章・第5章では、法華寺ならびにその西南に築かれた法華寺阿弥陀浄土院の造営を取り上げる。まずは瓦の様相を分別し、藤原京や興福寺の瓦がもたらされた藤原不比等邸・光明子邸、宮系統の新たな瓦生産が組織される皇后宮、皇后宮を引き継ぎつつ独自の文様瓦の生産が成立する法華寺、そして造東大寺司の援助のもとに瓦生産を急速に進めた阿弥陀浄土院というように、土地利用の変遷過程を詳細に復元した。また、正倉院文書の「造金堂所解」などの一連の文書群は、「金堂」の所在地をめぐる学界でも大きく評価が分かれているが、文書の内容と一致する五領池東瓦窯が阿弥陀浄土院に瓦を供給することなどから、その金堂が阿弥陀浄土院であることを考古学的に論証した。

第6章では、東大寺所用瓦の生産として、奈良山の未発見の窯と、興福寺の東で「東大寺山堺四至図」にもみえる荒池瓦窯とがある点を指摘し、荒池瓦窯は興福寺所用瓦工人の系譜をひきつつ、東大寺の瓦供給を支える役割を担っていく点を明らかにした。

第7章は、京内で寺院とともに特筆される離宮について、その考古学的特質を抽出し、法華寺内に嶋宮が存在した点を傍証するとともに、京内離宮の展開過程に言及している。

最終章では、これまでの知見に平城京の他の官大寺を含めて整理しつつ、基本的に宮殿や官大寺は個別の官司による管理体制にあったが、興福寺・法華寺・東大寺については相互交渉がある点を明示した。後者の諸寺院の関係は、王権を構成する藤原氏や光明皇后が新たな造営を推進した側面によるものであり、そこに当該期の王権の特徴をみいだした。

論文審査の結果の要旨

日本古代において、東大寺をはじめとする巨大な寺院の造営は、莫大な労働力を注ぎ込んで行われ、仏教による国家の安泰を目指す王権を象徴する所産である。古代寺院の造営に関する研究は、文献史学、建築史学、美術史学、さらには考古学など多様な分野から推進されてきているが、資料的な制約もあって、論争となっている点も少なくない。

本論文は、それらの主要な論争点について研究史をおさえつつ果敢に取り組み、考古学的な資料操作から新たな視点を提示している点で、まさに意欲的な論文であり、考古学に限らない関連諸分野の研究にも大きな影響を与える内容になっている。

また、そのために本論文では、膨大な量に及ぶ出土瓦に関して詳細をきわめた観察を行うことで、その製作技法などの変化をみだし、さらに瓦の分類による出土の分布状況な

どを検討することによって、興福寺・法華寺といった古代寺院の造営過程を詳細に復元している。とりわけ、調査が断片的でまとまった検討がなされておらず、重複した遺構の改変により複雑な様相を示していた、法華寺ならびにその前身の遺構に関して丹念な整理を行い、それがもたらした成果は目覚ましいものがある。この点以外にも、着実な基礎的事実に基づく新知見が随所に示されており、いずれも高く評価することができる。

ただし、この論文にも問題となる点が存在する。論争点への取り組みは評価できるものの、文献史料の解釈では現状の考古資料の不足を加味してもう少し幅を持たせるべき点や、事実の提示をふまえた歴史的な背景への言及が足りない点が挙げられる。また、個別の論点は明確であるが、本論文全体としての成果やその意義付けが十分とは言えず、タイトルに掲げた王権やその構造論に対してはなお一層の踏み込みが望まれる。

とはいえ、瓦などの考古資料から奈良時代の寺院造営の錯綜する様相を整理し、論争点にも新たな知見や視点をもたらした意義は大きく、今後この分野の研究の基礎となるものである。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。